

カレン族の農民化過程における家族儀礼

飯 島 茂

Family cults in the peasantization process of the Karens

by

Shigeru IJIMA

は じ め に

タイ国北部地方に住むカレン族¹⁾の文化変容については、すでに拙稿²⁾で大づかみな記述と分析をおこなってきた。そこで、本稿ではカレン族の文化を構成している諸要素の一つを取出して、文化変容についてややミクロな扱い方をすることにしよう。その手初めとして、家族儀礼がカレン族の農民化という文化変容の流れのなかで、どのような位置にあり、またどんな役割を果たしているかということについて述べることにする。

I 農 民 の 概 念

農民社会の研究は現在いろいろな立場からおこなわれているけれども、それを Geertz³⁾ が整理したところにより分類すると、だいたい次のようになる。

- 1) Robert Redfield の民俗社会 (folk society) と都市社会との対立する文化様式の一環として見る立場。
- 2) Julian H. Steward や Eric R. Wolf などを中心に展開されている農業生産者対地主、役人、商人、労働者としてとらえる見方。
- 3) Karl A. Wittfogel が提出している支配者対被支配者として考える見解。

以上のように、これまでおこなわれてきた農民社会の研究は3系列に分類することができるが、ここでは第1にあげた Redfield 理論を念頭に入れて、論を進めることにしよう。

Redfield 教授はメキシコ東南部のユカタン半島の調査研究を通して、二、三のモノグラフと多数の論文を発表し、それらを総括した形で、有名な「ユカタンの民俗文化」(*The Folk Culture of Yucatan*)⁴⁾を出版した。これらの研究の過程で、同教授は民俗社会—都市社会の理論

- 1) 本稿で扱うのはおもに Sgaw Karen である。以前の拙稿では、これを Skaw Karen と書いている。
- 2) 飯島 (1965), Iijima (1965), 飯島 (1966)
- 3) Geertz (1962) pp. 1-41
- 4) 参考文献参照。

を精緻化して、農民社会に対する認識を深めていった。

この本によると、同教授は他の学者といっしょに、ユカタン半島のメリーダ地方にある部族民の村、農民の村、小さな町、都市を比較社会的視野から調査をおこなって、「部族社会→農民社会→町→都市」という文化変容の図式を作りあげた。そして、この文化変容を次のように特徴づけた。⁵⁾

- 1) 孤立性の弱体化
- 2) 異質化
- 3) 複雑な分業
- 4) 高度に発達した貨幣経済化
- 5) 職業における専門者の出現
- 6) 親族組織の弱体化
- 7) 非人格的制度による統制への依存
- 8) 宗教的行事の減少と世俗化
- 9) 病気の原因を“あたり”に求めることの減少
- 10) 自由な行為と選択の拡大

ごく大づかみに言うと、農民化とは以上の文化変容の前半の部分の部分を指していると言える。すなわち、農民化という文字が示すように、ここではカレン族という“部族”が農民になってゆく過程である。そこで、農民とはどのようなものであり、またどのような社会を形成しているか、ということについて、Redfield 教授の定義⁶⁾を要約して、この節の締めくくりとすることにしよう。

“人間の社会とか性格を社会的に分析したり、歴史的観点から理解すると、農民は部族と都市の住民の中間に位置していると言える。農民はある意味で部族とも都市の住民とも似ている点があるけれども、それは対照的な意味においてである。農民は都市の住民と相違点があるという限りでは部族に似ているけれども、部族と差異があるという点では都市の住民に類似している。すなわち農民は、一方それに起源を有する部族的生活からと、他方都市とか文明から特徴を享受している人間もしくは社会と言えよう。農民は‘原始的’要素から成立している一つの類型であるけれども、同時に都市の存在や影響によって、ゆるやかになにか部族とは異なる

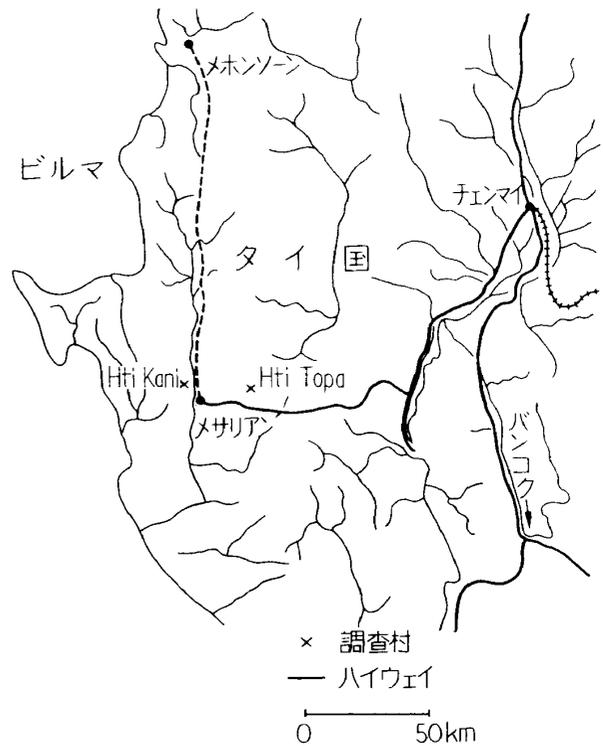


図1 タイ国北西部と調査村の位置

5) Redfield (1934), pp. 57-59, Redfield (1941) pp. 338-339

6) Redfield (1962) p. 286

ったものに形成されている。”

そこで、カレン族の家族儀礼 Oxe の実態に接近することによって、“なにか部族とは異なったもの”になってゆくカレン族の文化に、農民化の研究の足掛かりを求めることにしよう。

II 家族儀礼の実態

カレン族の社会を考えると、その組織は双系的傾向が強く⁷⁾、単系社会の多くに見られるように、氏族などを発達させていない。また、一般的にはかれらの形成している地縁集団もあまり強固ではない。そのために、いきおい家族がカレン族の社会組織のなかでは相対的に重要性を増している。

このようなカレン族社会のあり方は、宗教のあり方にも反映しているのは当然である。すなわち、いろいろなカレン族の宗教儀礼のなかでも、家族を中心におこなわれる Oxe 儀礼がいちばん大切であると考えられている。これは家の精霊 Bgha に捧げられる儀礼で、山地に住むカレン族はもとより、平地にいるカレン族のあいだにも普遍的に存在している。

また、Oxe の儀礼は本稿で扱っているスゴー・カレン族だけではなく、ポー・カレン族の間でもおこなわれているところを見ると、この儀礼がいかにかレン族文化の深層に根差しているかを知るのである。⁸⁾

スゴー・カレン式の家族儀礼は Oxe Chuko と言い、ポー・カレン式のもの Oxe P'go と呼ばれるが、両儀礼ともたいへんに類似している。とりわけ、この傾向はビルマよりもタイ国で顕著であると言われている。しかしながら、Oxe Chuko と Oxe P'go の間には微妙な儀礼上の差異が認められ、それがカレン族の農民化の過程を考えるうえで重要な意味を持っているように思われる。そこで、この二つの儀礼の相違点を明確にするために、本節では Oxe Chuko と Oxe P'go の儀礼のやり方についてやや立入って述べることにしよう。なお、Oxe 儀礼は地域によって若干の差異があると同時に、ビルマのカレン族の間には3種類の Bgha に対する儀礼が記録されている。⁹⁾ しかしながら、本稿の目的はカレン族民族誌の作成ではないので、タイ国西北部のメサリアン地方に住んでいるカレン族の家族儀礼に限定して記述することにする。

1. Oxe Chuko の儀礼について

Oxe Chuko は Oxe P'go の儀礼の場合と同様に、ある家の成員のだれかが病気になった時におこなう儀礼である。また、病気のような災害がその家の者に降りかからなくても、年に1度ぐらいは Oxe 儀礼をその“予防”のためにおこなう。これは家の精霊 Bgha を慰め、災害や事

7) 筆者の調査のほか T. Stern や F.K. Lehman などの諸学者もこのことを確認している。

Lehman (1967) p. 115 参照。

8) スゴー・カレン族とポー・カレン族は異なった言語集団と分類されているが、文化的には連続性が存在していると思われる。これについては別の機会に論じることにする。

9) Marshall (1922) pp. 248-257, Tongkham (1964) p. 15

故などを未然に防ごうとするのが目的である。

Oxe Chuko がおこなわれる場合には、まず“一家”の全員が呼び集められる。¹⁰⁾ 儀礼をすることが古い¹¹⁾で決定されると、Oxe に出席する成員の1人が使いに行き、出席予定者に“何月の何日に Oxe をする”と告げる。このような通知を受けると、たとえどのようなことがあっても、各人は万難を排して、儀礼に出席しなければならない。とりわけ、Oxe Chuko の儀礼集団の場合は成員が死亡するか、キリスト教に帰依するか、それともあとで述べる Chakasi になる以外には、いかなる事情があっても Oxe に出席しなければならない。もし、この儀礼集団の成員で1人でも欠員ができると、Oxe Chuko の儀礼は成立しない。たとえ儀礼をおこなったとしても、その効果がまったくないのみか、害があるとさえ言われている。¹²⁾ 従って、Oxe Chuko をおこなっている家では、欠席者がいると、儀礼をおこなわない。

この Oxe の儀礼集団は matrilineage を基礎に形成された社会集団で、Dopuweh とか Taduxo と呼ばれている。この社会集団は時には単婚家族、またある時には拡張家族と一致することもあるが、基本的には家族を形成する原理と多少異なった原理を持つ母系的社会集団である。

では図2に従って、Dopuweh について簡単な説明をしよう。Dopuweh の中心になる人物はその集団の最年長の女性で、通常は祖母であり、この図でいうと M₁ に当たる。M₁ の両親が死亡した後は、M₁ の夫である X もこの儀礼集団に入る。この X と M₁ の間にできた子供である M₂ と m₂ は両親もしくは母親の属している儀礼集団の成員であるけれども、息子 m₂ の結婚後に妻の両親が死んでしまうと、自動的に妻が属している他の Dopuweh に移ってしまう。また、m₂ の子供は m₂ 自身の住居がどこにあっても、m₂ の妻、すなわちかれらの母親の儀礼集団に属するのである。一方、母系の孫である M₃ も m₃ も

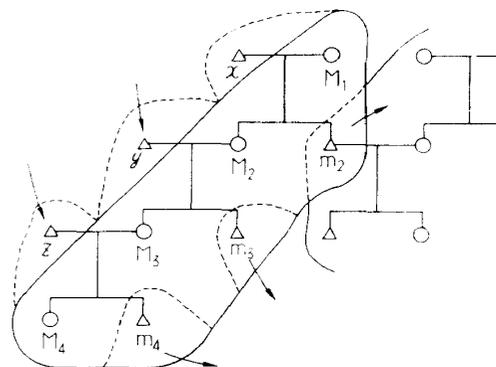


図2 Oxe の儀礼集団

注：カレン語 Dopuweh もしくは Taduxo

10) 実際は家族とは多少編成の原理を異にする社会集団である。しかし、ここでは便宜的に“一家”と述べておこう。詳細はあとで説明することにする。

11) この場合は鶏の両羽根を使ったもの。詳細は Marshall (1922) pp. 279-285 参照。

12) Certain customs and tabus incidental to the “Bgha” feasts should be noted. Unless all the members of the family are present at such a ceremony, except those excluded from the feast, the offerings are thought to be objectionable to the “Bgha.” If a person absents himself from a feast that is being held to promote the recovery of a sick relative, he is suspected of desiring the continued illness or the death of the sick one. Or his absence may be interpreted as an effort to bring calamity upon some member of the family. Such charges are made against the member of a family who becomes a Christian and remains away from the ceremony. The others allege that he no longer retains his affection for his kindred and is willing to bring illness and disaster upon them by his absence, which angers the “Bgha.” Marshall (1922) p. 257

この Dopuweh に属しているが、 m_3 は m_2 の場合と同様に、条件が整えばかれの妻の Dopuweh の成員になってしまう。 M_3 やさらに M_4 の配偶者はそれぞれ M_3 や M_4 の両親が死亡した時には、この Dopuweh に吸収されてゆく。

Oxe Chuko 儀礼の司祭役に当たる者は後述の Oxe P'go 儀礼の場合とは異なり、母系の原理が完全に貫ぬかれて、 $M_1 \rightarrow M_2 \rightarrow M_3 \dots$ と継承されてゆく。

Oxe Chuko の儀礼が始まるのに当たり、儀礼の司祭役である女性は出席者が室内に入るとを命ずる。一同が室内に集合すると、司祭者は儀礼に使用するなべを洗い始める。そうすると、参加者は静粛であることが望まれる。もし儀礼をやっている間に話をしなければならない場合には、カレン語を使用することが要求され、この地方のリング・フランカである北タイ語の使用は禁止される。その後、司祭役の女は室内で米をといで、囲炉裏の上にかけてたき始める。これが終わると、一同はいちおう室内から外に出ることは許されるけれども、それはテラスまでで、高床のはしごをおりて、家から出ることはできない。

なべの中の米が煮えあがり、重湯状の汁をたきこぼす以前に全員はふたたび入室しなければならない。ここで家の精霊 Bgha に捧げる鶏や豚が犠牲に供される。Hti Kani のような平地の村では、Oxe Chuko をおこなう家でも、最近では鶏だけを使っておこなう簡易な儀礼が多くなったと言われる。しかしながら、伝統的には鶏と同時に豚を犠牲にするのが理想とされている。

最もオーソドックスな Oxe Chuko の儀礼においては、豚の犠牲は部屋の中でおこなわれる。まず、出席者の中の男が豚の足や口をひもで結わえて室内に持込む。豚を部屋の床の上に置くと、出席者全員が刃物で豚の体に浅い傷をつける。すると、通常豚は大あばれをするので、いそいで豚の鼻を押えるか、ぬれた布で鼻をふさぐかして窒息させる。かくして犠牲が終わると、豚の体を火にかざして、体毛を焼く。その後、豚の体は解体されて、肉や内臓でカレー料理¹³⁾が作られる。料理が作られている間は、参加者一同室外の高床の所までは出ることが許されている。

豚や鶏などのカレーと御飯ができあがると、参加者一同はふたたび部屋の中に呼入れられる。そうすると、男性の年長者は御飯とカレーをバナナの葉の皿に盛って床の上に置き、精霊の Bgha に対して一家の加護を祈る。かれは“Bgha よ！われはすでに十分な糧^{かて}をみもとに捧げしたために、手もとに食物なし。それゆえ、ふたたびわが家にもどり賜わぬことを願う”ととなえながら、竹張りの床のすき間からバナナ皿の上に盛った食物を地面に落とす。

以上のことが終わると、儀礼の一環として Dopuweh の成員と精霊 Bgha の共餐がおこなわれ、男の年長者、女の年長者……長男、長女、次男、次女……といった男から女、年長者か

13) H.I. Marshall によると、元来は犠牲に供された鶏や豚を塩とトウガラシだけで味付けをするやり方もあったと言われる。しかし、今日のメサリアン地方では、それに香料を入れて、普通のカレーを作る。これも宗教儀礼の俗化の現われではなかろうか。

ら若年者の順序で御飯とカレーを食べる。しかし、この食事は儀礼的なものなので、あまり食べ過ぎるのは儀礼上よくないと言う。この際に食器の食物が残っている間は、出席者はだれも室外に出ることはできない。かくして、共餐が終わると、長子からじゅんじゅんに屋外に出ることが許される。

以上 Oxe Chuko について述べてきたが、豚を室内で犠牲にする Oxe Chuko は家族儀礼の中でいちばんオーソドックスなもので、Chuko Oxa と言われる。それに対して、鶏だけを使った簡易化された Oxe Chuko があり、Chuko Goma と呼ばれる。一方、Oxe P'go の場合にもオーソドックスな P'go Oxa と略式の P'go Goma の2種類の儀礼がある。このような Oxe 儀礼における様式の差異に関する研究は、民族学的にはたいへんに興味があり、重要な問題であると思われる。しかし、ここではむしろ農民化の研究という社会科学関心の方がつよいので、主題をオーソドックスな Oxe Chuko と Oxe P'go を比較し、分析することに限定しようと思う。

2. Oxe P'go の儀礼について

家族儀礼は Oxe Chuko も Oxe P'go もその目的や実施方法に大差はない。しかし、カレン族の農民化を考えるうえで、次のような重要な点について両者の間に微妙な差異を見出すことができる。

1) すでに前節で触れたように、Oxe Chuko の儀礼集団においては、母系の系譜の中で生存している最年長の女性が儀礼の司祭役になり、男性はその役をすることができない。すなわち、これに該当する女性がその家にはいない場合には、Oxe Chuko の儀礼は成立しないので、他の方法による儀礼を考えなければならない。

ところが、それに対して Oxe P'go の儀礼をする場合には、女性が司祭役に当たることが望ましいと言われているけれども、事情によっては男性でもこの役目を果たすことができる。たとえば、ある家でおばあさんがすでに死亡している時には、おじいさんが司祭の役に当たることができる。

2) 次に儀礼の参加者についてであるが、ここで言うまでもなく、Oxe Chuko の場合には Dopuweh 全員の出席が不可欠である。しかしながら、Oxe P'go の儀礼では、Dopuweh の成員がチェンマイのような遠方の町に行って、消息がわからない時にでも、儀礼を欠員のままおこなう。そ



写真1 山地カレン族と象の親子

して、Oxe のために作った儀礼用の御飯とカレーを乾燥・保存しておいて、欠席した成員が家にもどった際に、それを与えて、儀礼を完了する。

- 3) Oxe Chuko と Oxe P'go の儀礼のやり方で、たいへんに異なっているのは、豚の犠牲についてである。正式な Oxe Chuko では豚の殺し方が面倒で、犠牲



写真2 平地カレン族の家

を薄暗い室内でおこなわなければならないことは、すでに述べたとおりである。しかるに、Oxe P'go ではいちばんオーソドックスな場合にでも、豚は戸外で殺せばよいのである。犠牲に当たっては、豚を絞殺するか、口から水を流し込んで溺死させるだけで、室内に持込んだり、刃物で豚の生体に傷つけるといったような手数がかからない。

- 4) Oxe P'go の儀礼においては、豚や鶏が犠牲に供されるほかに、川の魚を用いることがある。山村の Hti Topa にはこの例はなかったけれども、平地村の Hti Kani では1例が認められた。それはPと言う老人の場合で、かれはチェンマイ県ホッド郡の Mae Papai 村出身のポー・カレン族である。P老人によると、ポー・カレン族による「本物」の Oxe P'go の儀礼はスゴー・カレン族の村でおこなわれている Oxe P'go とあまり変わらないと言う。しかし、ポー・カレン族の場合には、時々儀礼に魚を使用するのが特徴的であると述べた。魚は2匹必要であり¹⁴⁾、1匹の大きさは少なくとも指幅にして2本ぐらいなければならないとされている。この魚はうろこのある種類で、カレン語では nya plâ と言い、北タイ語では pa pong と呼ぶ。Oxe P'go の儀礼にはこれ以外の種類の魚は使用しない。

儀礼に魚を使い、そのカレーと御飯を精霊の Bgha に捧げても効果のない場合には、さらに豚を犠牲に供して、別な儀礼をおこなう。

最後に、Oxe 儀礼の様式を子供が親から受け継ぐ時の方法に触れてみよう。

一般的に子供は母親の Oxe 様式をとる場合がおおい。けれども、両親の Oxe 様式のうちで容易な方を踏襲するのを好む傾向があるのはいなめない。なお、男子は結婚後、妻の儀礼様式に従うのだが、これも決定的なことではない。妻がオーソドックスな Oxe Chuko 儀礼の煩わしさに閉口している際には、夫の Oxe 様式に従うこともありうる。

14) 魚を川に取りに行った時に、2匹以上つかまえた場合には、余分の魚は逃がさなければならない。

Ⅲ 農民文化への傾斜

1. Chakasi 儀礼による精霊 Bgha からの解放

これまで Oxe 儀礼に言及してきたので、カレン族の農民化を考えるうえで、Chakasi の儀礼について触れなければならないであろう。Chakasi の儀礼はカレン族を精霊 Bgha から解放し、Oxe 儀礼を放棄するための重要な手段である。キリスト教化することによっても、カレン族は Oxe 儀礼から解放され、ある種の農民化が進む訳である。しかし、これでは仏教化する道がほぼ完全に閉ざされ、クリスチャン・カレンという特殊な集団を形成する結果になるので、本稿ではこの問題をいちおう割愛することにしよう。

Chakasi はビルマで発生したと言われる仏教系宗教儀礼で、泰緬国境のサルイン川西方のビルマ領ではビルマ人が Nache と呼び、カレン族はこれを Che Che と言う。

平地カレン族の Hti Kani 村には同じメサリアン郡の北部にある Mae La 村から、シャン族の行者(Pusalā, またはカレン風のなまりでは Pusasā) がやって来て、Chakasi の儀礼をおこなう。なお、この付近の Mae Tè 村や Solū 村にもカレン族出身の行者がいて、これと同様の儀礼をおこなうと言う。

まえにも触れたように、Chakasi の儀礼の目的はある特定の Dopuweh の成員もしくはその個人と精霊 Bgha との関係を断ち、人々を Oxe 儀礼の煩わしさから解放するためのものである。その儀礼はだいたいのようにおこなわれる。

まず村で栽培しているとうがらし、稲、いんげん豆、大豆、とうもろこし、きゅうり、ごまなどの種子を黒焦げになるほど火であぶり、種子の発芽力を止めてしま

う。それに儀礼用に絞殺した鶏でカレー汁を作り、御飯や乾魚とともに村はずれの特定の枯木の所に持って行く。そこにはいろいろな精霊が住んでいると信じられている。枯木の前では、行者が食物を供えて“もし、ここにある種子とこの枯木から芽がいで、花咲かぬ限り、Bgha よ、どうかこの家にふたたびもどり賜うな”と祈りをあげる。祈りに用いる言葉はシャン語であり、読みあげるお経はビルマ語であるが、Chakasi 儀礼のためにだけ書かれた経典はないようである。Chakasi の儀礼は出席者の両手首に糸を巻く Kichu (もしくは Kisu) をもって終わるけれども、時には両手の親指と人差し指の付根に 1 カ所ずつ小さな入れ墨をすることもある。



写真3 平地村のカレン娘

Chakasi の儀礼を受けても、2代目までの者は年に2回ほど行者に来てもらって、Kichu による簡単な儀礼をしてもらわなければならない。しかし、この際には Oxe 儀礼とは異なり、Dopuweh の全員が家に集合する義務はないし、豚を犠牲にするような出費もともなわない。さらに、3代目の人間からは完全に Bgha から解放され、この精霊に関してはいかなる儀礼もする必要がなくなる。

なお、山地カレン族の村 Hti Topa でも、10年ほど前から、Hti Kani 村へ訪問して来て、Chakasi の儀礼をおこなうシャン族の行者と同一人物とおぼしき者がやって来て、Chakasi の儀礼をおこなっていると言う。この儀礼により、何人かの村人は Bgha から解放されて、Oxe 儀礼を中止した。調べてみると、その第1号は驚くな



写真4 シャン族の仏壇 カレン族のものには
仏像がない

かれ、この村の伝統的宗教指導者である Sappa の称号を持っている R 老人であった。かれはある日筆者にこっそりと、「Oxe をやめて、ほんとうにほっとした」と告白したのが印象的であった。¹⁵⁾

2. 農民化の象徴としての「仏壇」の導入

カレン族の間では、仏教文化の影響の強い平地の村ではもちろんのこと、その影響を直接的に受けていない山村においても、程度の差こそあるが、すでに仏壇の原型と思われる物が存在している。これがカレン族の家々に導入されたのと、Chakasi の影響があったのとほぼ機を一にしているのは興味深い。「仏壇」の導入はカレン族の文化と「大きい伝統」¹⁶⁾との接触を象徴する事実として注目に価いすることである。

15) 飯島 (1965) p. 13

16) The great tradition is cultivated in schools or temples; the little tradition works itself out and keeps itself going in the lives of the unlettered in their village communities. The tradition of the philosopher, theologian, and literary man is a tradition consciously cultivated and handed down; that of the little tradition is for the most part taken for granted and not submitted to much scrutiny or considered refinement and improvement. (Robert Redfield, "Peasant Society and Culture," *The Little Community, Peasant Society and Culture*, Chicago, 1956, pp. 41-42) Some of the little traditions would appear to be as widespread as the great traditions, and are doubtless known and practiced by far more people than many aspects of the literate tradition. "Little" and "local" traditions must not be confused, for "little" traditions are often nationwide in distribution. (Cf. Berreman 1961, p. 339)

山から降りて来たカレン族によって、平地の村 Hti Kani が設立されたのはすでに 3～4 世代昔のことである。そのため、まえにも触れたように、この村のカレン族はすくなくとも数十年から百年余りの間、周囲のシャン系仏教文化の影響を受けてきた。しかしながら、Hti Kani 村のカレン族に仏教の影響がかなりはっきりと現われ始めたのは、一説には数十年昔とも言い、一説には 30 年ほど前（戦争のすこし前）とも言う。その当時、この村にシャン系と思われる隠者が現われたと伝えられている。村人はかれをカレン族の精霊信仰のなかで、もっとも中心的な精霊である Hti Ksa Kaw Ksa の化身¹⁷⁾ではないかと思っ、たいへん丁寧に迎えた。

当の隠者は村の家々に“仏壇”の原型と思われる Dapo（花の家の意味、別名を Meteko と言い、これは葉のある所と言う意味）を作らせ、毎日御飯、花、水などを供えることをすすめた。初期においては、現在の山地カレン族の家にある Dapo のように礼拝対象物はまったく存在しなかったと言われる。だが、今日の Hti Kani 村では、高僧の写真や仏陀の絵画が Dapo に張られている。とは言っても、これにはシャン族の仏壇 (Ke Pla) や北タイ人の仏壇 (Ken Pa Chao) に見られるような仏像が安置されていない。この事実は Oxe 儀礼と関係があるが、詳細については「結語」のところで説明することにしよう。

一方、山村の Hti Topa に Dapo が導入された歴史は Hti Kani 村に比べると、かなり新しい事である。まえにも述べたように Hti Topa の村人によると、10 年前にシャン族の行者が Chakasi を広めるためにこの村にやって来た時に、家々に Dapo を作ることをすすめたと言う。そして、隠者は Hti Kani 村の場合と同様に、Dapo に対して花や水や御飯を毎日捧げるように教えた。だが、現在までのところ、Hti Topa の Dapo には仏像はおろか、Hti Kani 村で見られるような仏陀の絵や高僧の写真すら飾られていない。Hti Topa 村の山地カレン族は Dapo に供え物をする事により、現世的御利益を期待するか、せいぜいカレン族に“固有”な精霊信仰に結びつけて考えるくらいである。¹⁸⁾ いずれにせよ、この“仏壇”に象徴されているように、山地カレン族は平地カレン族と仏教という大きい伝統の影響を受けた程度、すなわち農民文化への傾斜の度合が違うように思われる。

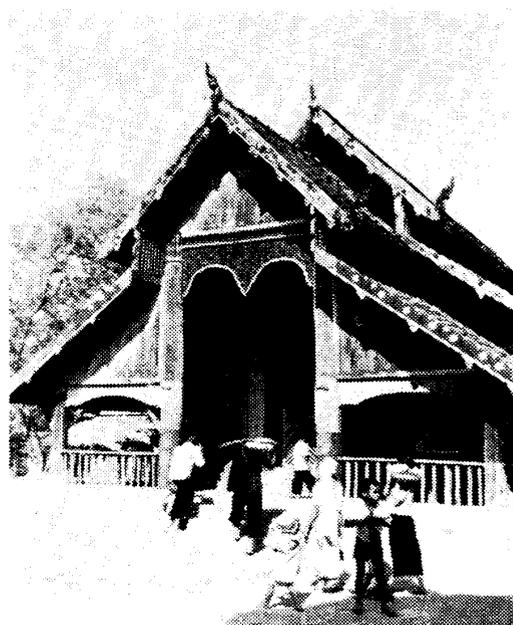


写真 5 寺院には熱心に通うが、仏教徒になりきれないカレン族たち

17) 平地カレン族のこの発想自体がたいへんに仏教的と言えよう。

18) 飯島 (1965) p. 14

3. 農民化の外的促進条件

カレン族もほかの東南アジア諸国における山地民系の住民と同様に、近年外部からいろいろな形の衝撃を受けてきた。そのため、カレン族の農民化が促進されてきたことは言うまでもない。問題を本稿で扱っている家族儀礼の Oxe に限定しても、カレン族に対する外界からの影響がつよくなるに従って、Oxe 儀礼に多少の変化が現われだした。この傾向はとりわけ平地に住んでいるカレン族の間で顕著に見出すことができる。すなわち、もともとは夜分におこなわれることの多かった Oxe が、最近では早朝におこなわれるようになった。それは外部の者、とりわけ官憲の目を避けるためだと言われる。昔は豚のような家畜を自分の家で屠殺する時には、税を役所に支払う必要はまったくなかったのだそうだ。しかるに、近年になって屠殺税が設けられて、豚を屠殺する際には1頭につき25パーツ(約450円)も郡役場¹⁹⁾に支払わなければならない。そのうえ、サリット時代(1958~63年)以降は中央政府の国民形成に対する努力がしだいに実を結び始め、以前に増して、司法や行政機構がメサリアン地方のような末端にも、すこしずつ及ぶようになってきている。かくして、メサリアンの町の周辺にある村々では、警察の目が以前よりも多少は住民の日常生活にも届くようになったと言われている。従って、カレン族の側から見ると、前よりは官憲の目が煙たく感じられるようになった。そのために、豚の屠殺を伴う Oxe 儀礼が人目につかない早朝におこなわれることになったのは当然である。

筆者の調査をした平地カレン族の村では、これまでに Oxe 儀礼のために豚を密殺することによって、警察に検挙されたり、郡役場に罰金を支払わされたりした例はない。しかし、メサリアンの町から1/2~1日行程の所にある Mae Han や Mae Top というカレン族の村々では、すでにこの件で二、三人の逮捕者が出ていると聞いている。そこで、カレン族の1人に、Oxe の儀礼をおこなう際に、なぜ警察の許可をとらないのかと尋ねてみた。かれの答を要約するとだいたい次の2点になる。その第1はかれらにとって25パーツの罰金は大金であり、この金額は一人前の男子の二、三日分の日当に当たるので、支払うのがつらい。第2の理由は、Oxe の儀礼をやると言うことをあまり他人が知ってしまうと、精霊 Bgha の怒りをかって、儀礼の効果が減少してしまうと信じられているからである。

Oxe 儀礼はカレン族が圧倒的多数である地域とか、外界から孤立した環境のもとにおいては成り立つし、かつカレン族の文化や社会における有力な凝集力の中心として機能する。しかしながら、谷間にある Hti Kani 村のように、タイ系の住民のまっただ中にあり、政府の出先機関のかなり強い影響下にある社会環境にある場合には、このような伝統的儀礼自体がすでに不適應をおこしている。そのため、なんらかの文化的調整が必要になってきているのであろう。このようにして、カレン族を取巻く客観情勢がかれらをすこしずつ農民社会の方向へと押しやっていることだけはたしかである。

19) 郡とはタイ語の県 (Changwat) の次の行政単位で、Amphoe と言う。

結 語

最後に、これまで述べてきた事をふり返りながら、カレン族の農民化と家族儀礼 Oxe の関係について考えてみることにしよう。

Oxe Chuko の儀礼集団、Oxe P'go の儀礼集団、さらに Chakasi になった者を比較して気付くことは、これらの諸集団の間に一連の文化的座標の移動が認められることである。これを模式化すると、図3のようになる。この模式図の矢印の方向に向かって、“自由な行為と選択の拡大”、“親族組織の弱体化”、“宗教的行事の減少と世俗化”が進行している。本稿ではカレン族の農民化過程の中で、問題を家族儀礼の変容に限定した。そのために、「はじめに」のところで述べた Redfield 教授による、10項目にわたる文化変容の特徴づけの一部にしか触れることができなかつた。しかしながら、この家族儀礼の変容の流れの中に、“部族”から“農民”へというカレン族の農民化の姿を見るのである。

この文化変容の中で、豚の犠牲の簡易化ないし中止はもっとも注目すべきことであろう。カレン族の説明によると、屋内における豚の犠牲とそれに伴う血²⁰⁾がカレン族の家々に仏像を持込むことや、すぐれて“本物”の仏教徒になることを妨げていると言う。“本物”の仏教徒になるためには、やはり Chakasi になることが前提のようである。

Hti Kani 村の村民によると、村の北方約20キロメートルの所にある Mae Lanoi 村一帯では、カレン族がシャン族と昔からながく混住していたので、前者は後者の影響をつよく受けて、Chakasi になった者がすくなくない。このため、そのカレン文化における仏教的色彩はきわめてつよく、生活様式のうえではカレン族とシャン族、また近年この地方に移入してきた北タイ人とはあまり明確な相違が見出せないと言う。筆者もその地方をおとずれた時には、これと同様な印象を得たのである。

いずれにせよ、カレン族の間では家の精霊 Bgha は社会的凝集力の核としての機能を持ち、Oxe 儀礼はその強力な文化的支柱としての役割を果たしている。この意味から言って、精霊 Bgha、従ってまた Oxe 儀礼はカレン族の農民化に対して、決定的阻害要因となっていることだけは間違いない。

謝 辞

本稿はタイ国西北部の農村調査に基づいて書かれたものである。調査の実施に当たっては京

20) おそらく仏教における殺生戒の一種の parochialization と思われる。

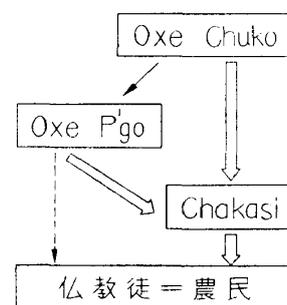


図3 家族儀礼変容の方向

注：矢印の方向は文化変容の方向を示す。また矢印の太さは変容の相対的容易さを示す。

都大学東南アジア研究センターの岩村忍所長、本岡武教授、石井米雄教授をはじめとする関係の教官や事務官の方々にはいろいろとお世話になった。また、在タイ国日本大使館はもとより、タイ国政府機関の諸氏や村の人たちにはひとかたならない協力や助力を賜わった。記して深謝の意を表したい。

参 考 文 献

- Berreman, Gerald D. (1961) "Himalayan Rope Sliding and Village Hinduism: an Analysis," *Southwestern Journal of Anthropology*, 17 (4), p. 339.
- Geertz, Clifford (1962) "Studies in Peasant Life: Community and Society," *Biennial Review of Anthropology* 1961 ed. by Bernard J. Siegel. Stanford: Stanford Univ. Press.
- Hughes, C.K. (1943) *Karens of Burma*. Westminster: The Society for the Propagation of Gospel in Foreign Parts.
- 飯島茂(1965)「タイ国北部における山地カレン族の文化変容」『東南アジア研究』第2巻第4号, 京都: 京大東南アジア研究センター
- Iijima, Shigeru (1965) "Cultural Change Among the Hill Karens in Northern Thailand," *Asian Survey*, V-8.
- 飯島茂(1966)「タイ国北西部におけるカレン族の平地民化」『東南アジア研究』第3巻第5号, 京都: 京大東南アジア研究センター
- Lehman, F.K. (1963) *The Structure of Chin Society*. Urbana: Univ. of Illinois Press.
- . (1967) "Ethnic Categories in Burma and the Theory of Social Systems," *Southeast Asian Tribes, Minorities, and Nations* ed. by Peter Kunstadter. New Jersey: Princeton Univ. Press.
- Lewis, Oscar (1955) "Peasant Culture in India and Mexico, A Comparative Analysis," *Village India, Studies in the Little Community* ed. by McKim Marriott. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Marshall, Harry I. (1922) *The Karen People of Burma: A Study in Anthropology and Ethnology*. Columbus: Ohio State University Press.
- Redfield, Robert (1934) "Culture Changes in the Yucatan," *American Anthropologist*: 36.
- . (1941) *The Folk Culture of Yucatan*. Chicago & London: Univ. of Chicago Press.
- . (1956) "Peasant Society and Culture," *The Little Community, Peasant Society and Culture*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Tongkham Song Saeng (1964) *Demonology Among the Karens*. Th.B. Thesis. Chiangmai: Thailand Theological Seminary.